

SESSION 2022

**CAPES
CONCOURS EXTERNE
ET CAFEP**

**SECTION : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
JAPONAIS**

ÉPREUVE ÉCRITE DISCIPLINAIRE APPLIQUÉE

Durée : 6 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

A

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 2	9 3 1 2

► **Concours externe du CAFEP/CAPES de l'enseignement privé :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B F	0 4 3 0 E	1 0 2	9 3 1 2

Épreuve écrite disciplinaire appliquée

L'épreuve est intégralement rédigée en langue française.

Le dossier présenté s'inscrit dans l'axe « Vivre entre générations »

1. Conception d'une séquence pédagogique

Parmi les documents du corpus, vous en retiendrez cinq, dont obligatoirement le document n°1. Vous en proposerez une analyse critique, puis vous les mettrez en relation en précisant comment ils s'inscrivent dans l'axe « Vivre entre générations » pour une classe de seconde générale LVB répondant aux critères suivants.

- classe d'une vingtaine d'élèves dont le niveau est relativement homogène.
- présence dans le groupe de 2 élèves ayant un niveau général moyen entre A1 et A2.
- présence dans le groupe de 3 élèves franco-japonais ayant un niveau C1 à l'oral.

Les cinq documents sélectionnés serviront à l'élaboration d'une séquence pédagogique prévue pour un nombre de séances raisonnable et adapté au niveau de la classe destinataire.

Les indications ci-dessous ne doivent pas être considérées comme un plan. Si les indications demandées doivent apparaître dans l'élaboration de votre séquence, vous pouvez proposer un autre plan pour votre présentation.

- Sur la base d'une analyse critique et d'une mise en relation des documents que vous sélectionnerez parmi ceux qui vous sont proposés, vous concevrez, présenterez et explicitez la séquence pédagogique que vous envisagez.
- Vous mentionnerez vos objectifs (linguistiques, communicationnels, culturels, éducatifs et de médiation interculturelle) et les moyens et stratégies que vous comptez mettre en œuvre pour les atteindre en fonction de la classe.
- Vous décrierez en particulier les étapes essentielles de votre projet éducatif et la façon dont vous envisagez d'évaluer les acquis des élèves à l'issue de ce parcours pédagogique.

2. Analyse de faits de langue

Dans le document n°1, vous identifierez les faits de langue soulignés. Après les avoir décrits et en avoir présenté le fonctionnement et les valeurs en contexte, vous déterminerez comment et selon quels

objectifs les intégrer à la séquence. Vous pourrez enrichir votre démonstration d'éléments relevant du même système et présents dans les autres documents que vous aurez sélectionnés.

資料1

高齢者のみの世帯が増加するいま、「シェアハウス」にブームの兆し!?



皆さんは、自分のおじいさんやおばあさんと一緒に暮らしたことはありますか？ 2011年現在、65歳以上の高齢者がいる世帯は、全世帯（4,668万世帯）のうちの約4割で1,942万世帯。そのうち「3世代世帯」は299.8万世帯と、年々少しずつ減ってきています（※1）。

一方で増えているのが「夫婦のみの世帯」や、独居老人と呼ばれる「単独世帯」。特に夫婦のみの世帯は581.7万世帯と、高齢者がいる世帯のなかでもっとも構成割合が多く、単独世帯と合わせると半数を超える（※2）計算になります。

そんな高齢者だけの生活には、万が一のときの不安がつきまとうものですが、最近新しい生活スタイルのひとつとして注目を集めているのが「シェアハウス」です。

若者を中心に居住スタイルの新しい形として市民権を得つつあるシェアハウスですが、いまでは若者と高齢者が一緒に住居で暮らすタイプのものや、高齢者限定の賃貸マンション型シェアハウスなど、その種類も多様化しているそう。

ちなみに、独居老人や孤独死が日本と同じように大きな問題となっているフランスでは、学生と高齢者の「世代間同居」がNPOや企業などが仲介に入って推進されていて、1,000組を超える世代間同居がフランス国内で行われているんだとか。こうした取り組みは、若者や高齢者の孤立やオールドタウン化（※3）、行政が高齢者を見守るコストの増加などを解決できるとして、高齢化が問題となっている諸外国からも注目を集めているようです。

※1 厚生労働省「国民生活基礎調査」（平成23年）より

※2 65歳以上の高齢者がいる世帯の総数に占める割合

※3 住民の高齢化や人口減少により、地域の商店街が衰退したり、住宅や施設が老朽化している問題

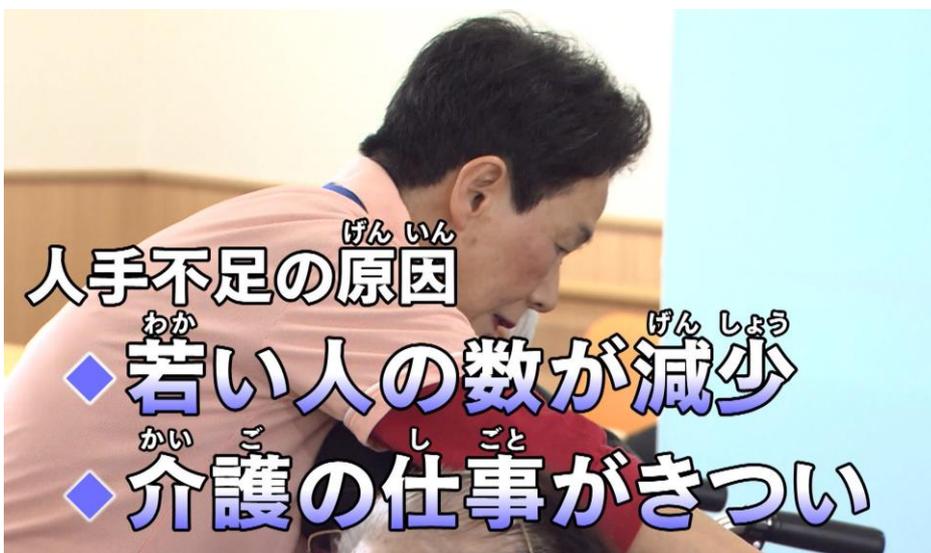
（出典 <https://helpmanjapan.com/article/1363>）

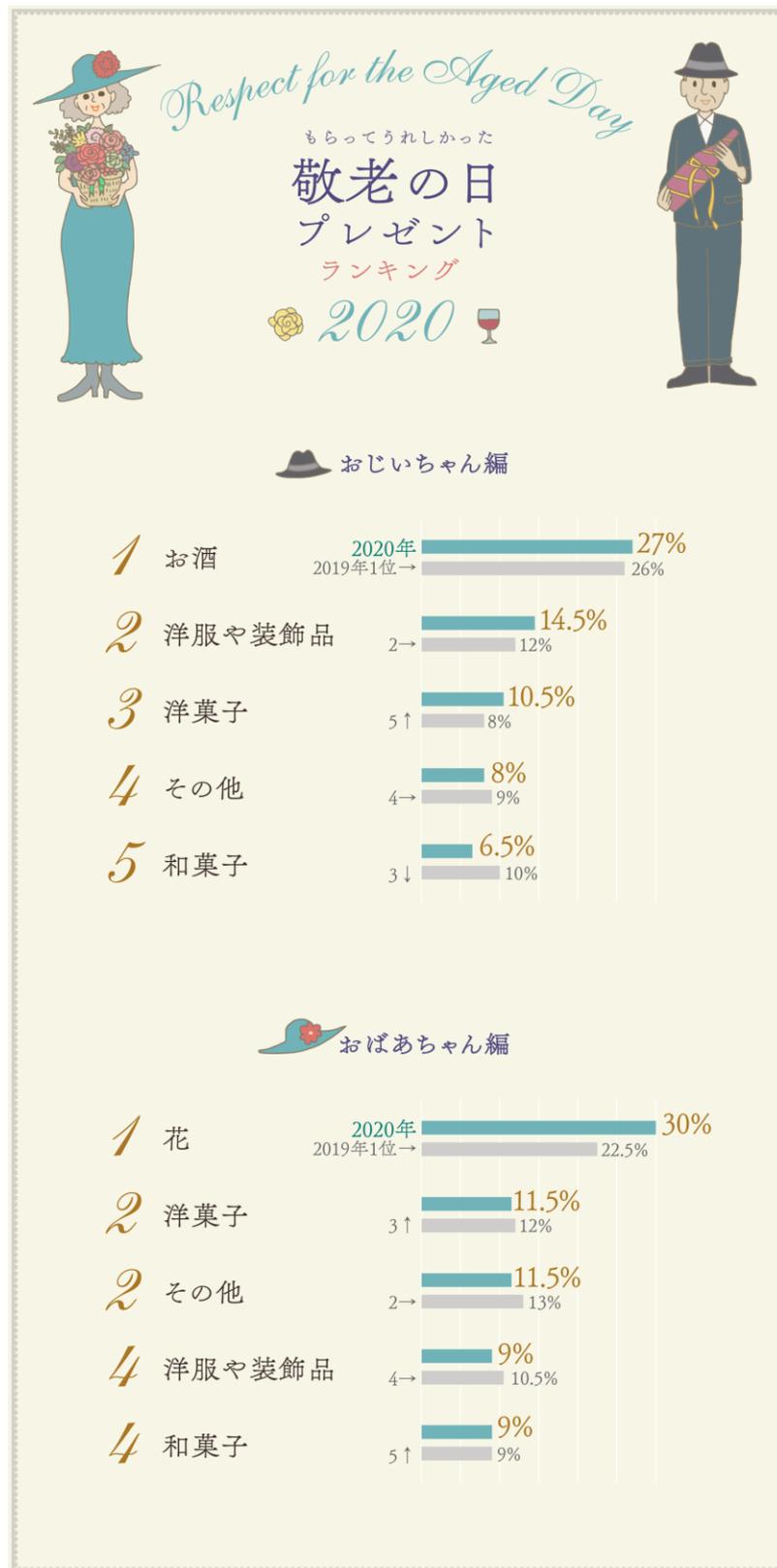
資料2

どうする？お年寄りのサポート

91歳の母、千代さんの面倒を見ながら暮らしている息子の青山誠司さんは68歳。このような、「老人」が「老人」を介護する「老々介護」が、今増えています。千代さんは「認知症」です。時々、自分が誰で、どこにいるのかわからなくなります。ひと時も千代さんから目を離すことが出来ない青山さんは、働きたくても働くことが出来ません。母親も自分もこの先どうなるのか、不安がつのります。家で介護を続けている人のうち、介護する人・される人がどちらも65歳以上という「老々介護」の厳しい現実が半分を超えています。高齢化が急速に進む、日本の大きな課題です。

（出典 https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005180266_00000）





【2020年版】祖父母に喜ばれる！敬老の日ギフトランキング

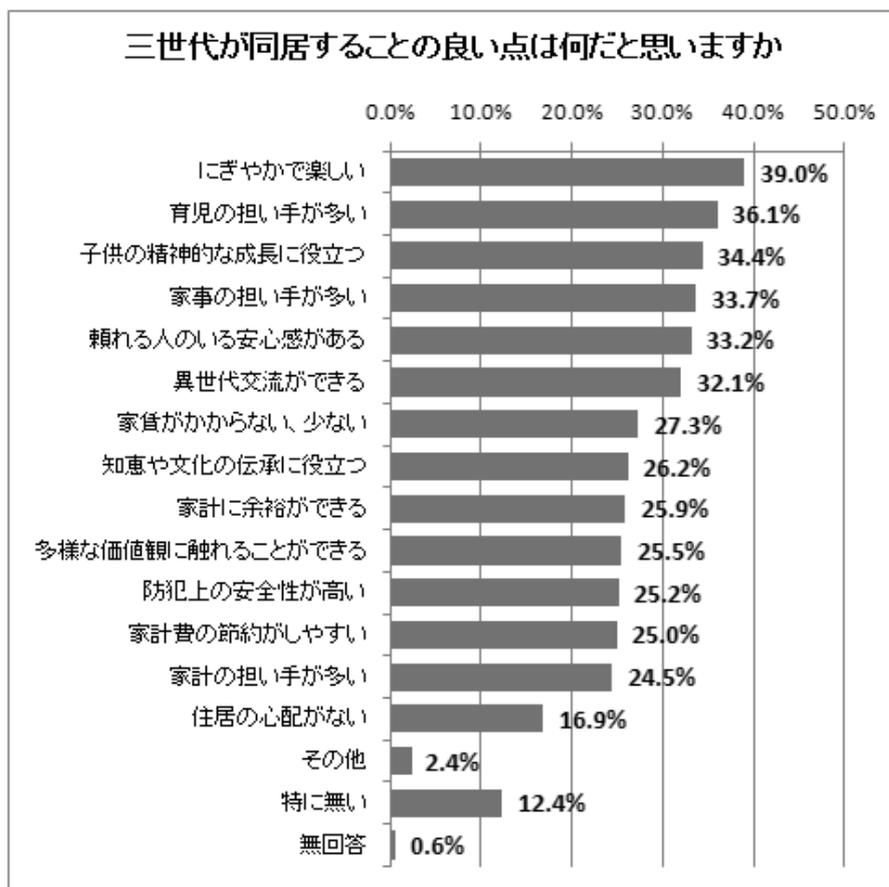
(出典 <https://www.ringbell.co.jp/giftconcierge/5281>)

資料5

56.9%が「プライバシー問題」...三世代同居のデメリットとは

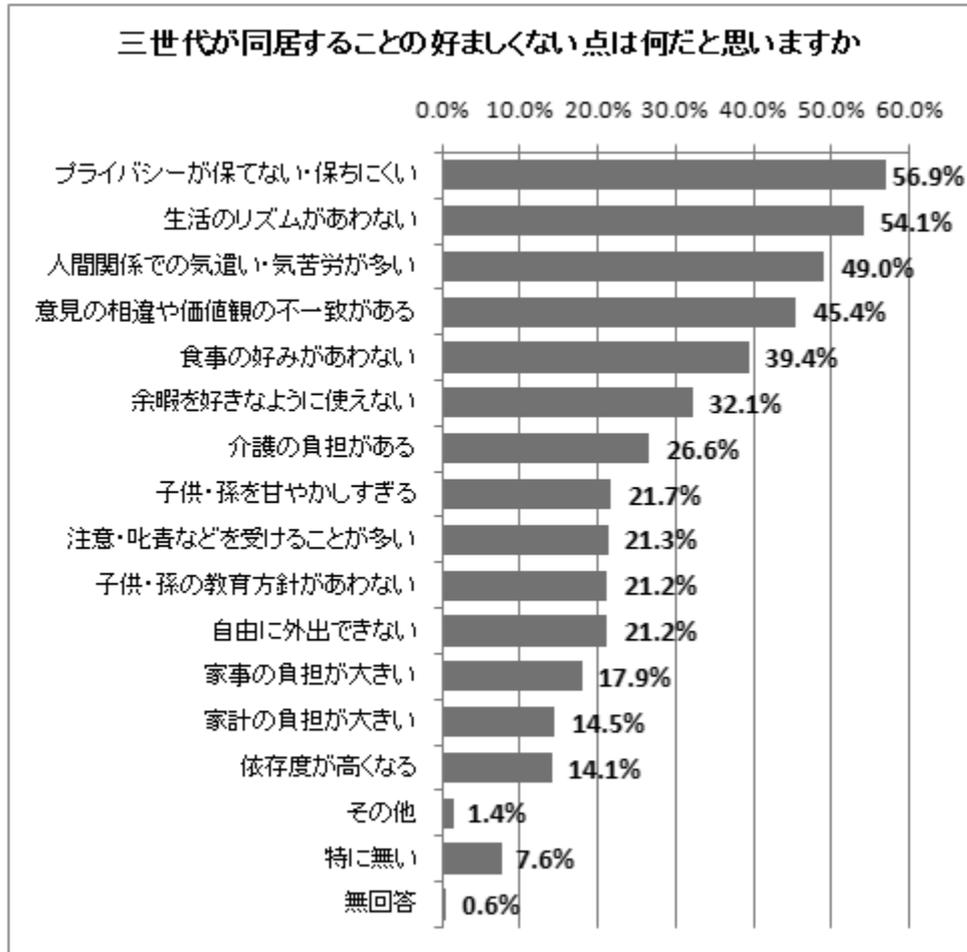
マイボイスコムは2009年12月22日、三世代同居に関する調査結果を発表した。それによると調査母体で「三世代が同居をすることの好ましくない点」を尋ねた結果としてもっとも多かったのは「プライバシーが保てない・保ちにくい」で、56.9%もの人が回答した。他に「生活のリズムがあわない」「人間関係での気遣い・気苦労」「意見の相違や価値観の不一致」など、親子といえども他人には違いないことを再確認させられるような意見が上位についている。

自分自身を基準として、自分の子供・自分の親を合わせた三世代が一つの住居に住む家族形態を「三世代同居」と呼んでいる。その三世代同居について、先に【三世代同居のメリット、トップは39.0%が「にぎやかで楽しい」】で触れたように、メリットとしては「頼りになる人生経験豊富な人」という認識で上の世代の人を見ていることが分かる。



↑三世代が同居することの良い点は何だと思いますか

それでは逆にデメリット、好ましくない点は何だろうか。こちらも複数回答で尋ねたところ、もっとも多い回答が寄せられたのは「プライバシーが保てない・保ちにくい」だった。56.9%、ほぼ5人に3人がそのような認識をしている。



↑ 三世代が同居することの好ましくない点は何だと思いますか

以前よりも一人ひとりが尊重される現在においては、「他人との境目」、言い換えれば「自分の領域」に他人が侵入されることを極端に嫌う傾向がある。家族・世帯における「一体感」「領域」が薄まった分、「自分の領域」へのこだわりが強く・濃くなったため、例え肉親でも「他人だからプライバシーが侵害されるのはたまらない」と考える人が多いのだろう。第三位の「人間関係での気遣い・気苦労が多い」も似たような事由によるもの。

物理的な問題点、例えば「生活のリズムが合わない」「食事の好み合わない」よりも、精神的な面での問題点が多いあたり、どの領域で「自分(が属している領域)の内側」と「外側」と見るのかに関する価値観が昔と変化しつつあることを考えさせられる結果ともいえる。

自分の「内側」なら多少の問題点も「なあなあ、まあまあ」で片付くが、「外側」にある(と認識している)と強い拒否反応を示すものである。

時代の流れと共に価値観や社会環境に変化が生じるのは当然の話。三世同居にメリット(特に少子化対策や若年層の金銭的な面)が多数あるにも関わらず、実際には実行している人、好ましいと考えている人が少数派なのは、ある意味時代の流れとして仕方がないのかもしれない。

生じるデメリットを解消する何か別の手を模索するか、あるいは社会環境の変化にも対応してメリットを享受しデメリットを出来るだけ少なくするよう、賢い方法を考えることが求められているのだろう。少なくとも今件アンケートのように、「メリットよりもデメリットの方が回答率が高い」という好ましくない状況は、そのまま放置するわけにはいかないと思われる。

(出典 <http://www.garbage news.net/archives/1208165.html>)

資料6

老若男女が集うシェアハウスがニッポンの問題を次々と解決？

阪神大震災で壊滅的な被害を受けた、神戸市・長田区は市内で最も高齢化率の高い地域だ。その一角に4年前にオープンしたのが、介護付きシェアハウス「はっぴーの家ろっけん」。認知症や要介護などの高齢者32人が暮らしているが、通常の介護施設と異なるのは、1Fのリビングが、親子連れや学生、外国人といった、介護とは無縁の人々で賑わっている点だ。その理由は、リビングをコミュニティスペースとして解放していること、そして、そこで生まれる「持ちつ持たれつ」にある。「はっぴーの家ろっけん」では、近所の母親が買い物に行く時などにわが子を入居している高齢者や近所の人に見てもらう一方、母親はその入居者の話し相手をしたり、資格が必要のない簡単な介助の手伝いをする。こうして助け合うことで世代をこえた交流が生まれ、介護スタッフの負担も軽減できるのだという。行政も視察に訪れるなど、今、全国的に注目を集めるこのシェアハウス。運営するのは、長田区で生まれ育った首藤義敬さん(35)。アイデアの原点は、小学3年生の時に経験した阪神大震災にあ

った。祖父母ら三世代で助け合い暮らしたことで、「大家族の良さ」を認識したのだという。しかし...新型コロナで、地域の人々が一カ所に集まるアイデアが、かえって「仇」となってしまふことに。そこで、首藤さんが打ち出したのが、新たな「介護住宅」を作る計画。地域のさらなる問題も解決できるという、そのアイデアとは？

(出典 https://www.tv-tokyo.co.jp/gaia/backnumber4/preview_20210119.html)

資料 7



河瀬直美監督『あん』、2015年公開 ポスター